
夢みた時間

ふるーつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢みた時間

【著者名】

Z8680C

【あらすじ】

交通事故で意識不明になつた蘭は、不思議な世界にいた。そこで出会つた謎の少女。蘭は無事、現実に戻れるのか?そして、彼女と新一の意外なつながりとは。

静かな所。

草原とも湿原ともつかない、やたらと縁のそじこみ、あちらこちら『色』が点在していた。

色とりどりの花や木が咲きほこるその箇所は、世に言つ桃源郷のようだつた。

その1点に、ひとりの少女が立ち上がつた。長すぎる髪をなびかせ、花畠のひとつへ向かう。

ふと、少女が口を開いた。同時に、強い風があたりを包む。

「なんであたし、てるんだらつ……」

「ねえ新一、次はこっちに行こうよ」

「はあ……つたぐ、オメーは」「——い」と「好きだよなあ」

やたら元氣のいい蘭に、新一がボヤく。まったく、女ってのはなんでこう買い物が好きなんだ そう言いたげだ。

「なによ。久々に要請がないから、どこへでも付き合つていったの、新一でしょ？」

水戸黄門の印籠の「」とく、新一自身の台詞を復唱する蘭に、一の句が継げない。

「……へイへイ」

今日来たのは、杯戸ショッピングモール。新一が組織を壊滅させ、蘭の元に戻つて半年あまり。やつと新一が関わるべき事後処理がほぼ終わり、元の日常に戻ってきた所だった。

と、道路の向こうにも、蘭はよせそつた店を見つけた。

「ねえねえ、おお店行ってみよ」

と、新一をひっぱって道路を渡る。信号は無論青だ。

しかし 信号のルールを無視した妙な車が、ふたりに向かつてつっこんで来たことに、先に気付いたのは蘭だった。

「危ない

！！」

新一がその異常に気付いたのと、蘭が新一を突き飛ばしたのは、ほぼ同時だった。

ズザツ 新一がしりもちをつく。が その音は、ドン！…という別の音にかき消された。

「…つ蘭！！」

即座に、地面に叩きつけられた蘭に駆け寄る。車は、やけにブレーキ音を響かせながら、瞬く間に走り去った。

「蘭ツ…しつかりしろ！」

声をかけつつ、脈や出血の状態を確認する新一。しかし、蘭の返事はない。意識を失っていた。

まもなく、誰が呼んだのか救急車が到着した。新一は、今確認した心拍や脈の状態を話しつつ、救急車に同乗した。

「蘭…蘭ツ！しつかりしろ！すぐ病院に着くから…！」

救急隊に任せたことで少し安心した新一は、蘭に声をかけることに専念した。

お前を、絶対に死なせたりしない そう心中で繰り返して。

……蘭は目を覚ました。上半身を起こし、あたりを見回す。やたらと、緑色の場所だった。足元が少し湿っているのは、雨でも降っていたのか。

と、後ろから声がした。

「あんた、どうしたの？」

振り向くと、中学までいっていないくらいの少女が、蘭を見下ろしていた。くちゅとした目は、少しつり気味。生まれてから、一度

も切つてないんぢやないかといつくりい、長い髪が田に田ひくべ。

「あ、えつと……」「」「どこのかな？」

真つ先に浮かんだ疑問を尋ねてみる。少女は少し首をかしげ、逆に聞いてきた。

「……あんたこそ、ここで何してんの？」

「あ、ごめんなさい。私さつき田が覚めたばかりで、よくわからな

いの」

「ふーん……」

少女はさして興味もなさうに、蘭に背を向けてすたすた歩きだした。蘭は慌てて後を追つた。

「じゃあ、なんでここにいるのか、全然覚えてないんだ

「やうなの。あなたは、いつからここに？」

並んで、恐らく「草原」部分にふたり座つて会話していた。少女の答えは意外だった。

「……わからない。あたしも、気が付いたらここにいた。どのくらいいるかなんて、もう覚えてない

「そう……あなた、名前は？私は毛利蘭」

「ああ。澄鈴。^{すみれ} 苗字は覚えてない」

「じゃあ、同じ花の名前なんだ。すみれちゃんって呼んでいい？」

「ぐつと頷くと、澄鈴はどこか遠くを見つめた。

「……ここにいると、色々忘れちゃうみたいなんだ。もう、あたしはほとんど覚えてないのかもしれない。覚えてるのは名前と……死ぬはずだつたつて事だけ」

「え？」

「あたしは死ぬはずだつた。それははっきり覚えてる。でも、なんで死ぬはずだつたかも、なんで生きてこんな所にいるのかも、もうわかんない」

「そうなの……」

それはすこく悲しいことではないのか。そう蘭は思った。大

切なものも人も、次第に忘れていくなんて……なんという悲しい。

蘭の感覚で、おそらく一昼夜が過ぎた。ふたりは、色々な話をした。

「あんたと話してると、なんか色々思い出す気がする。できるだけ長く、ここにいてほしいな」

言つてしまつてから、それがどうこう意味かわかつたらしく、「あ、ごめん。こんなとこ、長々といたくないよね」

蘭は、くすつと笑つた。

「すみれちゃんと一緒に、もう少しでもいいかな。でも出方がわからないんじや、ね」

「…あんたの家族は、元気にしてるの？」

「ああ、元気よ。お母さんは、ちょっと色々あつて別居中だけど」その言い方に、澄鈴はちょっと変な顔をした。

「あと、家族と同じくらい、大事な奴がいるなあ。幼馴染みなんだけどね」

「へー、幼馴染み？」

「うん。新一っていうの。工藤新一」「しんいち……」

澄鈴は、目を見開いた。次の瞬間、まわりの空氣が変わった。蘭は、確かにそれを感じた。

そして 空に、眩いばかりの光が現れた。
まばゆ

「え？……え！？」

戸惑う蘭とは対照的に、澄鈴は静かに一言、言った。

「……行きなよ。そこから出られる」

「え？どひして？」

澄鈴は、子供とは思えない微笑を浮かべていた。

「あんたが、思い出させてくれたから。あたしが、ここを『創つた』

理由を」

「え……！？」

蘭は、自分の体が浮くのを感じた。

「あたしは……あの時死んだんだ。でも、あの人にもう一度会いたくて、『生』にしがみつこうとした。で、こんな訳わかんないところを創つて、拳句あんたまで巻き込んだんだよ」

澄鈴がそう言う間にも、蘭の体は浮き上がり……透けていった。

「え、ちょ……すみれちゃん！」

そして澄鈴は、満面の笑顔で言った。

「大丈夫、あんたはまだ死んでない。戻れるよ。……新一兄さんに、ようしきくな」

蘭が目を覚ますと、今度は白い天井が目に入った。

「蘭！ 蘭！ ？ 気が付いたか？」

新一や園子だけでなく、小五郎も英理も、少年探偵団まで、心配そうに蘭を取り囲んでいた。

「園子！ 先生呼んでこい！」

新一の命令口調にも関わらず、園子はしつかと頷いて出でていった。

「峰は越しましたね。あとは安静にしていれば、じき退院できますよ」

診察が終わり、心配する園子をなんとか病室の外に押しやりると、新一は渋い顔で言った。

「悪い。オレが……お前に守られちまつたな」

自分が蘭を守ると、決めていたのに。蘭は答えるかわりに、新一に尋ねた。

「ねえ……すみれちゃんって子、知ってる？ 小学生ぐらいの」

「何だよ、急に」

「いいから」

「すみれ？……ああ、そういうえば」「

新一がコナンになる前、1件の強盗殺人事件の捜査に協力した事があつた。

金目の物はすべて奪われ、夫婦は惨殺され、ホラー映画のようになつた家の中で、ひとり震える少女がいた。

夫妻の一人娘、澄鈴。

新一は真相を追いながらも、持ち前のお人好しで、何かと話し相手になつてやり、えらく懐かれた。が 事件は解決したもの、まもなく澄鈴は癌ガンに倒れすみれそのまま永眠した。

「それを後で知つたんだけど、さすがに……複雑だったな」「そうだつたんだ……」

「で？それがどうした？」

「あ、うん。寝てる間、その澄鈴ちゃんに会つてね。新一によろしく、つて言われたの。……信じないならそれでいいわよ」

『は？』という顔の新一に、蘭はむくれた。

「でも 多分、澄鈴ちゃんが助けてくれたんだろうねー……」

彼女はきっと、安らかに眠つているだろう 今度こそ、両親の元で。

(後書き)

思つてたより長くなりました。初短編です。
冒頭で澄鈴がつぶやいた言葉の全容は、「なんであたし、こんな所
で生きてるんだろう」です。

元々、落書きしていく生まれたキャラ、澄鈴。妙に愛着がわいて、
小説に登場させる事に。ちなみに落書きの中では、えらくコスプレ
っぽい衣装を着せておりました。

病名ですが、癌ってそんなに早く「臨終するのか?」と思いつつ、手
っ取り早いので癌にしちゃいました。それに関してのつまみは受け
付けません(笑)

これからも、こんな感じの短編をつづけて書けたり、と思いま
す。『精読?』ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8680c/>

夢みた時間

2010年10月8日14時41分発行